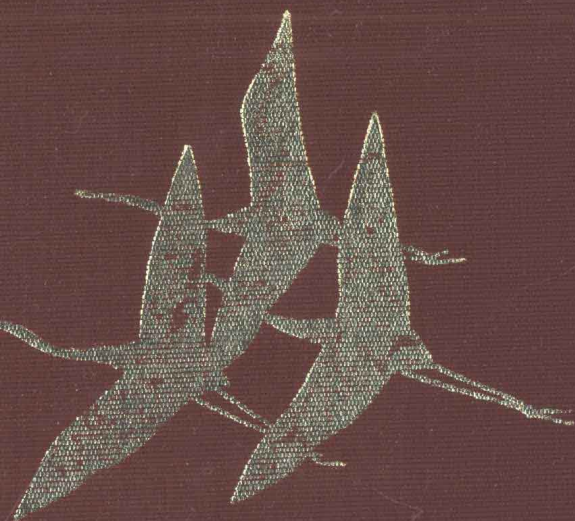


徳川家光(二)

山岡莊



監修 桑田忠親／村上元三／尾崎秀樹

山岡莊八全集

181

徳川家光 (二)

講談社



山岡莊八全集 31

徳川家光(二)

著者 山岡莊八

装幀 加山又造／蟹江征治

発行者 三木 章

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目一丁目
電話 東京(〇三)九四五一・一・一二(大代表)
振替 東京八二二九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 株式会社 堅省堂
製函所 株式会社 岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十八年二月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八三 藤野稚子 155 ENZ 06-13991-2 (10) (文芸)
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えします。

目次

図説・徳川家光（カラー）

地の声 天の声の巻

時流と運命の巻

卷末特集

列伝・徳川家臣団〈25〉 松平乗邑 綱淵謙錠

評伝・山岡莊八〈25〉 師・長谷川伸 清原康正

別刷 タイムトラベルの楽しみ〈25〉 宮脇俊三

插
絵
堂
昌
一

徳川家光

(二)

地の声
天の声の
巻
時流と運命の
巻

地の声 天の声の巻

春日の闘い

一

家光の本質は、決して大胆不敵でもなければ、いわゆる放胆というのでもなかった。むしろ神経質な細心さを、勝気で包もうとする型であった。或いは人情などは人一倍厚いのだと言った方がよいかも知れない。

それにしても、春日はるかの局つばねの言葉は、どう判断しても何処かが狂っているときか思いようがなかった。

伊勢から、新しく慶光院、第七世の院主が、「——継目御礼」として近日江戸城にやってくるということは、家光も聞かされていた。年齢は確か十七歳だと言っていた。

しかし新院主が、どのように若く美しいにせよ、どのように賢いにせよ、これを、そのまま江戸城の奥へ、家光の側室として迎え入れようなどというのは、正気の沙汰とは思えなかった。

伊勢の慶光院は、初めは後醍醐天皇の皇女祥子内親王で、伊勢神宮いせのみやの斎宮いさのみやであられたが、後に、帝が笠置山に遷幸された時、髪をおろして庵いおりを結ばれたのが最初であった。

その当時は、まだ慶光院の名はなかったのだが、そのあと、初代の守悦上人は、京の公卿飛鳥井家の姫を迎えて継がせ、その式年遷宮も杜絶された戦国時代には、それこそ代々の院主の、いかにも女性らしいひたすらなる悲願と奉祀によって、再び織田、豊臣、徳川と、その由緒を現代に伝えたという、伊勢大神宮とは切っても切れない関係にある臨済宗の尼寺だった。

その五代目の清周上人が、家光の乳母春日の局と特別親しく交わっている。そのことは家光も薄々知っていた。

そして、五代目清周上人は今から五年前の寛永十一（一六三四）年に隠居して、いったん第六世の院主に周宝尼を立てたのだが、これは病身で、やむなく参議六条有純の息女で、母を失った悲しみから、慶光院の喝食立かつしょくたち（剃髪せずお

下げ髪の寺小姓)となっていたのに、その後を継がせたのである。

こうして慶光院の第七世に決ったのだから、当然髪も剃りこぼち、喝食立の時とは違って、女上人らしく、紫衣の法衣に金襴の袈裟で江戸へやって来ているのに違いない。

それを、春日の局は、世継ぎをあげるため、側室にせよ、いや、正式な謁見の前に、とにかく大奥で秘かに逢っておけというのだから、どう考えても常軌を逸している。

(いったい、尼僧に横恋慕して、これを無理やり側室にしたというような、色情狂みたいな前例があるかどうか考えてみるがいい)

平清盛にしたところで、常盤御前を妾にはしたが、これはせいぜい源氏の大将義朝の想いものに過ぎなかった。源頼朝にしても然りである。舎弟義経の想いもの、静御前に心を動かし、鎌倉八幡宮の舞台で、大きな恥を掻かされている。

それを事もあろうに、伊勢の大神宮にお仕えしようとして決めて出てきた慶光院を、自分の大奥へ横奪りした……などと言われたら、それ一つで、徳川三代の將軍家光は、箸にも棒にもかからぬ暴君の烙印を押されてゆくに違いない。「春日よ。こなたのことじゃ。よくよく思い詰めてのこと

と思うがの。世の中には食指を動かしてよいものと、食指がそのまま破滅に通ずることがある。そなたの今見ている夢は、子を愛して、子の身を破る恐ろしい夢とは気が付かぬか？」

するとまた、春日の局は哀れむように一笑した。

「上様は、この春日がそれほど信じられませぬか」

「そのことよ。信じておればこそ悲しゅうなるのじゃ。よいか、その夢だけは捨ててくれ。こなたがすすめる女子ならば、他の女子は拒むまい。いや、予としても今では世継ぎが不要とは考えておらぬのじゃ」

すると春日の局は、姿勢を正して厳しく言った。

「では、上様は、これが東照権現の仰せであっても、お断わりなされまするか？」

「これこれ、春日、そのような脱線は聞き苦しいぞ。こなたが予のため、生涯を賭けて尽してくれた……そのことを想えばこそ申すのじゃ。この世に女子の数は幾らもあるう。よいか、他を捜せ。他を捜せよ」

「そうはなりませんね！」

「なに、そうはならぬと……!?」

「はい。春日の局のお名は、わらわも上皇さまより頂きました。その名にかけてのお願いなのでございます」

「なに、上皇のお名にかけて……？」

「はい。くどくは申しませぬ。慶光院の喝食立だった六条家の姫が、七世をお継ぎになるについて、いったん京の生家へお戻りになりました。むろん天子さまや上皇さまにお目通り申上げ、お許しを得るためにござりましょう。詳しいことは、この春日もよくは存じませぬ」

「それとこれと、何の関係があるというのじゃ？」

「はい……その時上皇さまが、何を思召されたか、それも春日などの知るところではござりませぬ」

「むろんのことじゃ」

「しかし、その時、育ての親の清周上人は、困ったことじやと仰せられ、内々でこの春日までお洩らしがござりました。慶光院第五世の清周尼は、いわば伊勢大神宮の再建に心身を捧げ尽してお働きになされたこの日本の大功臣にござりまする。それで第七世を急いで江戸に差し下されしました。いいえ、すべてはこのお方が美しすぎました。いいえ、そのうえ賢すぎたと申上げてもよろしゅうござりましょう。それで急いでこの度江戸城へ差遣されたのでござりまする」

「春日、それがいったい、どうしたと申すのじゃ!? 予がせっかく禁裏との氣拙さを払拭するため、どのように努め

たかは、そなたもよく知っているであろう」

「はい。よく存じておればこそ申すのでござりまする。上皇さまは、お心にそまぬことがおわせば、さっさと何百年もの前例を破られ、御位を幼い今上さま（女帝明正天皇）にご譲位遊ばすほど勝気なお方でござりまする。それがようやく東福門院さまとお仲睦まじく、修学院の離宮作りなどに心をこめておわすところへ、またぞろ氣拙いことになつてはと、それこそ清周尼公のご心配は、ひと通りのものはござりませぬ。それゆえ春日は心に決めました。そのようなお美しく賢いお方は、こちらの大奥に頂戴致すが上上吉、それでもしもお世継ぎでもと、これはわらわの愚かな夢でござりましょうや……？ 春日は、まだまだ老耄は致しておりませぬ。上様は男らしゅう知らぬ顔がなされませぬか」

言い終ってまた微笑をふくんでいる春日の局を見て、さすがの家光もゾーッと全身が総毛立った。

すでに女盛りは過ぎて、額にも頬にも老いがにじみ出ている。しかし、氣力だけはまさに凄まじい迫力と言っていた。

二

(そうか、そうだったのか……)

家光にも、この途方もない春日の局の思案がようやくハッキリわかつてきた。

美しすぎる女性には、常に一つの不吉な禍^{わざわい}が付きまとう。家康の祖母も実母も、そのため、幾度も良人^{おとこ}を変えなければならなかったと、家光も春日の局からよく聞かされていた。

いや、そんな遠い祖先でなくとも、家光の生母徳子、阿江^{あゑ}の方^{かた}もまた、同じような道を歩ませられてきていたのだ。

浅井長政の三女に生れた家光の母は、三人姉妹の末姫であった。一番上の姉が秀吉の愛妾淀の方。次の姉は京極高次の室。そして、末の姫がすなわち家光を産んだ秀忠の阿江の方であった。

阿江の方^{かた}が、初めて結婚させられたのは美濃井口の城主四万石の佐治与九郎一成だった。佐治与九郎は織田信長の妹の子に当たっている。つまり与九郎一成の父は、信長の妹婿佐治信方なのである。

この阿江の方^{かた}の最初の良人、佐治与九郎は、小牧の戦の後、三河へ帰る家康を、尾張佐屋の渡しで、船を出して渡してやったというので、秀吉の怒りを買ひ、

「——そんな奴に、阿江の方はやっておけぬ」

と離縁させられて、今度は信長の四男、丹波少将秀勝に嫁がせられた。しかし、この秀勝は、文禄元(一五九二)年の朝鮮の役に、戦地で病死してしまったので寡婦となり、次にはさる公卿^{きうけい}の妻になった。

このことは、わざと柳営婦女伝では省略されているが、実は、その次の四婚目が、年下の二代將軍秀忠に当たっている。

秀忠が女性関係でも稀に見る几帳面な性格だったので、ここでは大御台所^{おおみだいどころ}と呼ばれ、千姫、子々姫(前田利光夫人)、勝姫(松平忠直夫人)、初姫、家光、忠長、和子(東福門院)と七児をあげているのだが、何度でも良人を変えなければならなかったという意味では、決して幸福とは言い得なかった。

春日の局のように勝気で、自分から良人の許を去って徳川家の大奥に仕えるような女性は稀で、文字どおり、美人薄命が常識になって転々と良人を変えなければならない時代であった。

それだけに、男性の女性を見る眼もまた、まことに安易なものであった。どこまでも窮屈な政略結婚がある代りに、側室は身分次第、腕力次第で、何人持とうと勝手な一面を持っている。

そうした時代を生きぬいてきた春日の局が、

「——なんとしてもお世継ぎを得なければ……」

そう思い詰めている時に、慶光院の尼公として十七歳の参議六条有純の姫が江戸城へやって来ることになったのだ。

恐らくそれを訊いた時に、この負け嫌いで家光想いの乳人は、膝を叩いて心に決めたのに違いない。

（そうじゃ、その姫をこっちへ攫ってしまおう！）

言うなれば、伊勢の慶光院という準尼門跡の比丘尼の院主相続は、代々江戸の将軍が任命する形式になっている。

そうなれば、それを認可するまでは、たとえ紫衣の法衣をまとうてあろうと、頭を丸めてあろうと、まだ正式な尼公でもなければ院主でもない。

したがって將軍家光がこれを見て、

「——これは予の大奥に欲しい！」

と、懇望切なるものがあれば、横奪り出来るとするのが春日の局の解釈だった。いや、それをしなければ、上皇が

これに想いをかけさせられて、そのためせっかく御仲睦まじくならせられた上皇と東福門院の御仲が、またぞろ冷却してゆく怖れがあると、いかにも女らしい心配が刻みつけられている。

（いったい、それほど、絶世の美女などというのが、この世にあるのかどうか……？）

とにかく春日の局は、それを堅く信じきっている。

或いは上皇が一目で動揺したというのだから、家光もホッとなるに違いないと思ひ込んでいるのかも知れない。

（人には、人それぞれの好みもあるものを……）

しかし、春日の局の案ずるように、そのため、東福門院が上皇のお側から遠ざけられ、それが原因で、再び江戸と京都の間に気拙い空氣が入り込んで、それこそ一大事だという気もしないではなかった。

「春日よ、ならばその、六条参議の姫に、どうしても逢わねばならぬと申すのか」

「はい。正式にご引見なされては、まさかに許さぬとも仰せられませぬゆえ」

「と申して、もしも予が、その姫を大奥に横奪りしたらそれこそさるお方が、怒られると思わぬのか」

「はい。それは思ひませぬ」

「あつさり申すの。何故怒らぬとわかるのじゃ？」

「はい。いったんご機嫌伺いに仙洞御所へ参上した姫を、

そうか、惜しいの……と、仰せられて帰したのでござりまする。いったん帰せば、その時にはおあきらめ遊ばされたと受取って差支えござりませぬ」

「なるほど、のう……」

「むろん上様は、そうしたことはご存じない。ところが大奥でご覧になって……」

「予がその、十七歳の小娘に惚れるのか？」

「そのとおりにござりまする。そなたは美しすぎる。慶光院の尼には向かぬ。伊勢大神宮のお側にあるものが、参詣してゆく善男善女の心を狂わせるようなことがあつては恐れ多い。それゆえ、そなたはこの大奥に預かることにする。そう仰せらるれば鶴の一声、なるほど、あれは美しかったで、神宮もご安泰、仙洞御所もご安泰、そして、この国もご安泰にござりまする」

「フーン。こなた、相当の軍師じゃの」

「軍師でなくば、上様の乳人は勤まりませぬ。世間のことはようご存じとは申せ、とにかく、大分に八方破れのお方ござりまするゆえ」

「八方破れと申せば、その方、さるお方が伊勢に詣でて、

慶光院を京に連れ帰る……というような仕儀になつては、一大事とみるのじゃな」

「はい。それゆえ、こつちに取込めておくに限ると存じまする。そして、お世継ぎでも挙げさせられましたら、それこそ大神宮さまのご加護にござりまする。美しさ、賢こさでは、群を抜いてござりまするゆえ」

「そこまで聞くと、家光の双眸もたしかに光を加えてきた。春日の局の言う八方破れの男の本性が、どこかに火を点じたからに違いない。

「フーム、無理を申すものじゃの。しかし、そなたがそうして、清周尼とまで連絡して立てた軍略とあれば、そう無下に叱りもならぬ。では、せいせい慎重に事を運べよ」

「心得てござりまする」

「伊勢からは、誰々が供して参っているのじゃ？」

「はい。麴町代官町に拝領のお邸に、長老に当ります二人の老尼と、新院主のお身廻りをお世話申上げる若い尼が二人、他は山田奉行の花房志摩守と、道中警護の役人衆、慶光院の徒士十数名にござりまする。むろんこちらでは、これに寺社奉行の者が出まいて、宿舎の警固に當っております」

「そうか……それにしても哀れよのう、その十七歳の尼公

どの、まだ何も知らずにおるであろうが」

「はい。伊勢から江戸まで九十九里八丁の道のり、何れも初めて見ます春の景色ゆえ、上々のご機嫌だったと、長老たちから連絡がござりました」

「よしよし。止むを得ぬ。なるべく^{いたわ}勞つてとらせるように」

さすがの家光も最後には、ホロリと小さく声をおとして言い足した。

三

こうして慶光院の新院主が、一人の老尼に伴われて、秘かに大奥を訪れて来たのはその翌日の午後であった。

むろん新院主は、將軍家光にお目見得する前に、京において幼いおりに顔見知りの家光の御台所、鷹司氏に内々でご挨拶をと聞かされて、連れて来られたのに違いない。

この御台所はその名を孝子と言い、家光よりも二歳年上だった。したがって、寛永十六年の三月下旬の今は、すでに数え年三十八歳になっている筈。その三十八歳になっている御台所が、一族六条家の姫に、前もって逢っておきたいと言え、極めて自然な事の運びであった。

慶光院もむろんそのつもりなので、特に念入りにお剃刀を当て直し、紫衣の法衣に金襴の袈裟を着け、数珠をつまぐりながらやって来たのに違いない。

しかし、通されたのは、中之丸さまとも称されている御台所の居間ではなくて、襖いっぱい扇面散らしの草花が描かれた、いかにも高雅な女性らしい大奥の御殿の一つであった。

正面の上段の間には、ふちどりの鮮かな御簾が掛かつていたが、その奥に誰がいるのか？ 中の姿は見えなかった。

老尼の一人と春日の局に伴われて御簾の前に坐らせられると、

「御前でござりまする」

と、老尼が言った。そこで慶光院もうやうやしく左右の二人にならって僧形の頭を垂れていったのだが、その御簾の中から、御台所の声にしては些か太すぎる、急き込んだ声が洩れた。

「そ、そなたが、六条どのの姫か？」

「はい。慶光院の院主にござりまする」

すると、左側の春日の局がシィッと云った。

「まだ慶光院の院主ではござりませぬ。六条参議の姫さ

ま、お万どのにござりまする」

言われてみると、たしかにそれはそうであつた。正式にはその認可を得に来てゐる身ゆゑ、正式の対面が済むまでは、六条有純の姫か、それとも慶光院の喝食立といふべきだつた。いや、喝食立というのもおかしい。喝食立はまだあでやかな女装をした振袖の稚児姿でなければならぬ。

御簾の奥からまた声がした。

「こなた、両親に別れを告げるおり、仙洞御所へも伺候しやうか？」

「はい。ご挨拶に参内致してござりまする」

「そのおりには、今のお身なりか、それとも稚児の姿でか？」

「はい、そのおりには喝食立でございました」

「そ、そ、そうか」

中の声は、少し急ぎ込んでまた言った。

「その方、伊勢の山田から、江戸まで何里の道のりか存じておるか？」

「はい。九十九里八丁、百里に少々足りぬと、お付きの者に聞かされてござりまする」

「その百里足らずの道中の間で、何が、いちばん心に残つたぞ？」

「はい。お山の姿では富士の高嶺。海辺の景色では江戸に入りますあたりの高輪の海と松と白砂の美しさにござりまする」

「そなた慶光院に参る前に、何を好んで読まれたぞ？」

「はい。源氏物語、伊勢物語と、それから万葉集、古今集などでござりまする」

「ならば、伊勢へ参つてからは？」

「はい。大学、論語、中庸、孟子などの他に、仏祖三教、臨濟録、四部録などを、清周尼さまに、手を取つて教えて頂きましてござりまする」

「そうか、それはよかった。では、もう一つ何うが、こなたが京で仙洞御所へ伺候のおり、上皇さまよりは、何ぞ特別のお言葉はなかつたか？」

「はい……かくべつ……のお言葉は、なかつたように存じまするが」

「それはよかった！ では、改めて何分の沙汰あるまで、先ずゆるりと旅の疲れを慰すよう。何か不足のこともあらば、長老から春日の局へ申出るがよい」

その頃には、慶光院のお万の方も、御簾の内なる人が御台所の鷹司孝子でなかつたことをハッキリ感じ取つていた。